

小栗虫太郎コレクション



(第1巻)

二十世紀鉄仮面 (桃源社版)

使用方法

目次の操作方法

表示させたい部分にカーソルを近づけると手の形に変わるので、ここでクリックすると該当のページまでジャンプします。

本文から目次へのジャンプ方法

本文ページの右上にボタンがあります。これをクリックすると、目次のページまでジャンプさせることができます。

二十世紀鉄仮面

序 篇 死の都／第一篇 豪華船を追うて

第二篇 地獄船／第三篇 鉄仮面の花嫁

第四篇 金眼銀眼の秘密／第五篇 仮面を覆う鉄の仮面

後光殺人事件

135

聖アレキセイ寺院の惨劇

156

夢殿殺人事件

185

失楽園殺人事件

209

オフエリヤ殺し

223

潜航艇「鷹の城」

250

人魚謎お岩殺し

307

解説

種村 季弘

339

「二十世紀鉄仮面」挿絵

茂田井 武

二十世紀鉄仮面・他

ヴォルテール以来、「鉄仮面の男」の悲話は、小説で、映画で、涙香の翻案で——いまは、誰一人知らぬ者ない高名な物語である。

それは、ルイ十四世の御代に、死んで青黙が生えるまでも、鉄の仮面を顔としていた囚人の物語である。しかも、奇怪なその囚人は、さまざまに取り沙汰されて、小説では、ルイ十四世の双生子の弟とされている。

が、事実は、正体が何物であるか分らないのである。そうと伝えられた他にも、或はモンマウト公とか、ボーフォール侯とか云われ、またマンツアの大使、エルコロ・マッティオリが擬せられたこともあった。しかし、結局は、それ

の人々にも、死亡年月が証明され、鉄仮面の正体は永劫の闇扉に鎖されたのである。その男は誰か、いかなる罪科で永獄の囚人となつたか、ま

序篇 死 の 都

二十世紀鉄仮面

た仮面を用い、その顔を見せまいとしたのは何故か——以上の疑惑を解こうにも、今は反響一つない空しさである。

ただ吾々は、バスティーユの監守長「デュジエンカの記録」同典獄サン・マールの甥「フォルマノアール回憶」更に、懺悔職問僧「グリフェの日記」などによつて、辛くも、仮面の外貌だけを知るに過ぎない。すなわち——

——その囚人は、顔に鉄の仮面を嵌められて、最初は、ビッグネロールの塔に幽屏された。続いて、昇床にのせられて、聖マルグリートの塔から、バスティーユにと護送された。その時、有名な、例のマルシェルと云う、仮名が、バスティーユの囚人台帳に記されたのである。死は、一七〇三年十月十九日急激に起つて、屍体は、聖ポールに埋葬された。

幽囚の悲劇は、今とて変ることはないが、この物語は、あまりにも悲惨である。諸君は、リゴーの描いた、「夜のバスティーユ」を御存知であろうか。それは、梢の揺れる、白々とした月夜——。ベルタンディエルは、八つの櫓楼を、簾のようにならせて廳々と吹き入る風は、いつとなしに牢獄の壁を蝕ばんでゆくのだ。

その、荒れさびれた斑が、一層物凄い色を湛え、不気味な微笑を泛べて、ゆらゆらと揺めく壁の上には、無辜を訴え、密告者を呪い、あるいは禁獄の月日を長々と数えたのや、ま



た刑場に引き出される朝、爪を破り、唇の血などを記した。聴くもおぞましい、執着や呪いが印されているのだ。しかも、その底の暗さ、吐息に濁んで、空氣と云うにも、あまりに湿った土の香りである。仮面には、細かい黒が一面に蔓っていて、所々に、白い、草の枝のようなものが垂れ下っている、その微かな仄めきは、ちょうど闇夜に、檻から下つて、蜘蛛糸を見るようでもあって、それからは、何とも云えぬ、荒廃と悲愁の気が送り出で来るのだった。

また、そうした月のある深夜に、刎橋の軋み、濁気の音を聞きながら、ふと、戸外の澄んだ空氣、波打つ緑の野を思うと、幼ない頃の想い出が、それからそれへと繰り出されて行くであらう。そして囚人は、壁に十字を映す、格子の影をぼんやりと臍めて、まだまだ機会のあつた、聖マーグリートの頭を憶い出すのである。

その頃は、折々監守の眼を盗んで、自分の名を、リンネルの布や銀の皿などに書き記して、それを格子窓から浜辺に投げたことがあつた。けれども、今までの距離があまりにも短かかったので、人々が、仮面姿を認めて、馳せ付ける頃にはなかつた。湧き立つ波頭に、羽毛のごとく、弄ばれて、遠く沖合に消えゆくのを見るのみであった。それを想うとき、仮面の顎には、泣いているような皺が波打つてゆくであらう。

事実、その海の底には、いまも無限の哀傷を湛え、静かに眠る、仮面の男の顔が横わつてゐるのだ……。

ルイ朝に次ぐ、二人の鉄仮面——。

それを聞いたとき、読者諸君は、駭き惑いのあまり、平凡な日常生活から急に飛躍して、荒唐無稽な、神秘不可思議な世界に、移されたのではないかと疑うであらう。なるほど、真昼の幽靈に接した経験のないわれわれは、むしろ浅薄な滑稽な感じの方が強く、まるで千一夜物語の磁石の山の話でも聴く心持がするのだ。

船の釘が、一斉に吸い付けられて、あつと云う間もなく、シンボットの船が碎け散つてしまふその話は、ちょうど第二第三と銘打たれる、鉄仮面のそれに髣髴としている。

けれども、秘密警察と云う、変則の額縁から眺めてみると、それは絶対に、奇怪な戯画ではないのだ。

しかも、仏蘭西の人事録法、旧帝政露西亞の秘密警察組織、ブロシャのシュティベル法、澳大利では、メッテルニヒに編み出された衛戍区組織など、悪業の限りをつくす、闇の手を知れば知るほどに——そくそくと迫る、現実の恐怖を斥けかねるにらがいなし。

事実、この物語は、神と憐憫と慈悲の敵——秘密警察との闘争で貫かれてゐる。殺人事件で裝われてゐるとは云え、もともとより以上の魅力は、あの予測もできぬ暗合の神祕にあるのだ。

実際に、端を肥前五島の殉教史に發して、改宗尼僧の秘蹟から、その後現代にまでも撻々と絶たれぬ暗合の絲——いま

その物語の影響は、古い家に住む、私にはことさら酷かつた。はや、巻の中途で、胸が轟きはじめ、おずおずと這い寄つて来る、幽愁の氣に耐らなくなるのだ。

そして、無限の感動に酔い、人に、仮面に、あの見知らぬ男の終焉を知つたのではあつたけれど、また反面には、かほどの奇怪な、陰惨な悲劇が、よもや二度とは続くまいと信じられました。

ところが、その後時とともに、私の考えも、だんだん変わってゆくようになつた。それは、人ではなく、仮面そのもののみならず、その苛烈さを語る、恰好な例として、いつも、鉄の仮面は定紋視されているではないか。

しかも、その伝統を、今なお追つていて、各國の政府が、間諜、暗殺、秘密監察などの魔手を、公々然と振つてゐる以上、たとえば此處に、そうした奇怪な囚人が、二人三人現われ出ようと、あながらそれは、蓋然率の上で咎むべきではないとさえ信するようになった。あの、闇の世界に君臨して、狂暴、残忍、兇惡の限りをつくす絶大な権力——それを知る私には、ただ一度の機会と、そして、光りが欲しく思われ来た。ところが、予期にたがわず、此處に、二人の鉄仮面が現われることになった。

や、二人の鉄仮面をつなぎ、更に、南九州の一角を、陰謀の渦に捲き込もうとしている。それが、この一篇の主流、大伝奇の琴線であつて、物語中、もっとも驚くべき奇異な点なのである。

けれども、飽くまで貪婪な作者は、その二人の鉄仮面に就いて、順序通り語ろうとはしない。まず第三のそれを明かにし、逆に第二の史中人物は、第一篇の末尾に置いて、そこに腰まじい劇的頂点を盛り上げようとするのだ。

さて、その第三の鉄仮面とは何物か、また、秘密警察などと云う、奇怪至極な存在が、この日本の何處にあるのであるうか。

諸君よ、私が次に語る、闇の手を導調として、おどろとひしめき狂う、底流の轟きに耳を傾け給え。

一九三〇年四月二十一日の払曉頃

白みかかたが、まだなお深々と蒼い空、地上は暗く、葉末には、微かに黎明の戰慄が顛えていた。空には、星と交わるような、雲雀がただ一羽、しかも、小さなその一点に、ちょうど止り木とも見える一群の煙突があつた。

地平線に近い、東の空の閃めく暁の明星の下に、黒いがつしりとしたものが蹲まつてゐるのだ。曙は、まさにそこから始まろうとしている……。

眞暗な、伽藍のよくな、極東紡績川崎工場の屋根が、ほんのりと薔薇色に染んで来た。と、その頃、隅の通用門がギイ

ツと押し開かれて、何とも分らぬ奇妙な恰好をしたもののが現われ出て来た。

星の光、小鳥の歌、風の溜息、花の香り——たがいに贈り合は春の息吹に明けゆこうとするとき、地獄に向う最初の轍が印されて行つたのである。

それは、今どき稀らしい、一台の荷積馬車であつた。

馬の嘶き、車輪の響、鞭の音が薄闇の中でして、その奇異な馬車は、朝霧を乱して、力のない速歩を踏んでゆく。と、内部がて国道近くで、姿がはっきりとなつた。その奇異な馬車に、サーベルらしい閃きが見えた。

しかも、中央に据えた、人容のものを取り囲んでいて、みな夢の洞からでも出て来たような顔をしている。黙つて、車の動搖に身を任せ、朝の冷気に真蒼な顔をしているのだ。

その死体が、極東紡績川崎工場で、はじめて悪疫に斃れた最初の男なのであつた。

その男は、前日の午頃、軽い悪寒を感じたが間もなく嗜眠状態となり、全身が鉛色に変つて來た。そして、僅々十時間足らずのうちに、激烈な肺出血を起して斃れてしまつた。

と云うのは、検鏡の結果、その男の死因が、劇症黒死病と決定されたからである。そうして、川崎全市は曙とともに、怖ろしい黒疫の翼に覆われてしまつたのであつた。



の三人が揃つている。しかし、法水の眼は、眼下の深淵を静かに落着いて覗き込んでいるように、冴々としていた。

その云うのを聞くと、まるで黒疫の背後に、ある何者かの手が働いているような口吻だった。

「ねえ御両人、君たち二人は、細菌が細菌であるが故に、伝播したと云うが、僕の説は、聊かちがうんだ。で、その手つ取り早い話が、今日の発生個所さね。僕は、それに、目的意志があると、見て取つたよ。決して、今日のは、自然のままの伝染じやない。そこで、試しに、小日向台町から順ぐりに線で連ねてみた。すると、やや歪んだが、Sの字になつた。

そして、二ヵ所残った切れ目が、士官学校に兵器廠跡となる。どうだね、もし、この二ヵ所に発生したとしたら……そ

うなつたら、Sが8になつてしまふぜ。もちろん、その一角は黒疫の壁で包囲されてしまうんだ」

「話は、いかにもよく分るがね。しかし、君の云うS字形も、元来偶然に出来たものじゃないかと思うよ。一体、細菌を使つて、誰が何をしようとは云うんだ」

街路には、濡れた鋪石の上に、遠い炎の反映が赤々とうつっていた。歩道には、動いている人影一つなく、そこは、廐墟のような静けさであった。

所々、間を置いて、防寒が艶るる明るみの中から浮き出でいる。

そして、その奥は、闊深い、重々しい荒漠たる闇である。法水は、喪心したような眼を返して、

「では、此方から聞くがね。そうして包囲されてしまうと、内部の居住者は、防寒から外へは一步も出られなくなつてしまふ。出たら最後、その場去らずに、射殺の憂目を見なければならん。所が、何と云う事だ。明日は、臨時議会の開会日じゃないか。開期僅か四日の間に、特殊工業利得税と云う難物が審議される」

「うん、高峯陸相が、軍需工業者に下そとする、あの鉄樋か……」

「そうだ。そこで熊城君、君に一つ、この点を考えて貰いたいんだ。この黒疫の壁が、もし出来上つた時にだね。その時、朝野の議席に、いかなる変動が起るかと云うことだ」

その時、車が士官学校の前を通り過ぎたが、二人の眼は、

しかし、その翌々日、今度は、同じ会社の吾嬬工場に現われたので、ようやく、それまでは不明だった、伝染経路がはつきりとした。それは、最近入荷した、孟買綿花によるものなのであつた。

かくて、帝都は、暗澹たる死の恐怖に包まれた。予期されるものは、ただ突然の、そして急激な死の出現のみであつた。

その日のうちに、吾嬬町の一部は、嚴重な交通遮断をされ、市民はその一角を、礪猛な暗のようを見て、怖ろしがつていた。所が、次の朝は、小石川小日向台町に飛んでいて、夕方までに、四谷の伊賀町まで、点々と數十カ所の発生を見た。涸瀝地に近い、劇場や盛り場はみな大扉を下して、人々は、家中に閉じ籠つて顛えていた。

耳を澄すと、遠く近く、聞き分け難い、ものの響が伝わつて来る。騎兵だ、戒厳令だ、内乱だ——と、苦しい悲惨な亢奮のなかで、脳がしきりと夢想をはじめのだ。死の恐怖の底を乱して、立ちのぼる濁りのように、さまざまの流言が、風のごとく行き過ぎてゆく。

そうして、その夜のうちに、倉庫もろとも、綿花の山が焼却されることになった。一刻一刻と、暗が濃くなるに従つて、その焰が、帝都をますます物凄い色に染めて往つた。と、その頃、外濠に沿うて、一台の警察自動車が走つていだ。

内部には、法水麟太郎をはじめ、支倉検事、熊城捜査局長